

[4]

氏名	千葉美保子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	文博第214号
学位授与の日付	平成26年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	近世ロシアにおける外国人 —新外国人村とその住民たち—
論文審査委員	主査教授 中村仁志 副査教授 朝治啓三 副査教授 芝井敬司

## 論文内容の要旨

千葉美保子氏の博士論文は、17世紀なかばのアレクセイ帝の治世期を中心に、近世ロシアにおける西欧出身の外国人たちの活動の軌跡、ならびに彼らに対する処遇の変化をとりあげ、これらの分析を通じて、宗教、文化を異にする外国人に対峙し、それへの対応をせまられたロシア社会の様相を明らかにすることを主たる目的としている。

博士論文の構成は、以下のとおり。

### 序論

#### 第I部 外国人と外国人村

第1章 17世紀以前のロシア社会と外国人

第2章 17世紀前半における外国人

第3章 新外国人村の人口調査—『1665年人口調査簿』より—

第4章 新外国人村における住民たちの暮らしと争い

#### 第II部 アレクセイ帝の眼差し

第5章 17世紀後半における外国人たちの活躍

第6章 アレクセイ帝の劇場—アレクセイ帝治世の文化政策—

### 結論

序論において、千葉美保子氏はロシアにおける外国人ならびに外国人村の研究史、外国人村の建設を命じたアレクセイ帝の歴史的評価について整理しつつ、議論を明確にすべく本論文で使用する用語の定義を行っている。

本論は二つの部分からなっており、まず第I部で、外国人と外国人村が分析の俎上にのせられる。

第1章では、ロマノフ朝成立以前のリューリク朝時代の外国人の問題がとりあげられる。西欧から到来した商人や各種の職能をもったいわゆる「お雇い外国人」が、ロシアにおいてどのような生活を営んだか、「ナリ」や「コクイ」と呼ばれた外国人居住区域の状況はい

かなるものであったかが検討されている。

第2章においては、ロマノフ朝の成立以来、17世紀前半にロシアに流入してきた外国人と彼らに対する対応に焦点が当てられる。西欧から来訪した、商人、軍人、職人たちなどの活動について跡づけたうえで、非正教徒である彼ら外国出身者に対してロシア正教の聖職者を中心に反発が高まったのに対処すべく、「新外国人村」と名付けられた外国人専用の居住地（以下、外国人村）が建設されたことを明らかにし、その設立について定めた1652年の勅令の内容と性格を分析している。

第3章では、1665年に行われた外国人村の人口調査（以下、『人口調査簿』）を題材にして、設立後10年余りを経た外国人村の実態が解明される。まず、『人口調査簿』の作成経緯等をめぐる検討がなされた後、『人口調査簿』に登録された約200戸の世帯について、その世帯主、同居人、使用人などがつまびらかにされる。また、これとあわせて、さまざまな事情から外国人村以外の場所に居住していた外国人たちの状況についても触れられ、ロシアに在住した外国人の全体像が描き出されている。

第4章では、外国人村における日々の暮らしのありさまが住民による自治の問題と関連させつつ分析される。千葉氏によれば、外国人村の住人たちは、母国から持ち込んだ慣習・文化を維持しつつ、それをロシア文化と融合させて外国人村独特の文化を形成した。さらに、外国人村の住人には一定の自治権が認められており、彼らの自治組織とロシア政府が互いに譲歩する姿勢をもちながら、均衡を保ちつつ各々が秩序維持の役割を担っていたとの指摘がなされる。

つづいて第II部では「アレクセイ帝の眼差し」と題されているように、アレクセイ帝と外国人たちの関係に焦点を当てつつ、アレクセイ帝のもとでの西欧化の進展と改革の動きについて論が展開されている。

第5章ではアレクセイ帝治世期における外国人たちの活動の諸相が考察される。千葉氏は、ロシアにおける外国人の活動にかんし、先帝のミハイル帝時代とアレクセイ帝時代とのあいだに一定の連続性があったことを認めつつ、後者においては商工業や軍事勤務などの面で、より活発な活動が見られたことを、スコットランド人傭兵のパトリック・ゴードンなどのケースを取り上げながら詳述している。また、新外国人村で生まれた外国人の子弟、すなわちロシア出身の外国人とも言うべき者たちの国政への参与についても関心を向けている。

第6章では、アレクセイ帝と外国人の関係が文化政策の面から考察されている。アレクセイ帝はキリスト教化以前の「異教的」性格を残す伝統的音楽の担い手であったスコモローフを排除する一方で、西欧の音楽、演劇などには関心を示した。千葉氏は、その具体的な例として、外国人村の住民などを中心に行われた劇場建設と演劇上演に着目してその詳細を明らかにしつつ、演劇上演が単なる娯楽にとどまらず、フランス王権などのケースと同じように権力を象徴する手段であり、絶対主義への傾向を示すものであった可能性を示唆している。

これらの考察を踏まえ、結論において、千葉氏は、外国人村が、その規模の小ささやモスクワの中心部から離れていたという立地上の問題などを考慮しても、ロシア社会に大きな影響を与える潜在能力をもっていたと総括するとともに、これを建設させたアレクセイ帝については「古来の慣習が残るロシア社会に配慮しながらも、西欧化と絶対主義という

新たな傾向を明確に打ち出した、非常にバランスのとれたツアーリであったといえる」と評価している。

## 論文審査結果の要旨

ロシアの近世史において西欧化は最も重要なテーマの一つであり、さまざまな観点から研究が進められてきた。西欧化について最大の焦点となってきたのは、いうまでもなく 17 世紀の末から 18 世紀初にかけてのピョートル 1 世による改革である。実際、ピョートル自身がその一員として参加した西ヨーロッパへの使節団の派遣、西方への窓としての新都ペテルブルクの建設など、ピョートルのもとで西欧化が大きく進展した点は否めない。その一方、ピョートル自身が幼少期に足しげく通ったモスクワ郊外の外国人村が、彼の西ヨーロッパへの関心を培ったのも周知の事実であり、外国人村は、ロシア国内に存在した「内なる西ヨーロッパ」としての意義を認められてきた。千葉氏の研究は、ピョートルの父アレクセイ帝の時代に設立された外国人村について、その実態を解明するとともに、これが 17 世紀のロシア社会にどのような影響を及ぼしたかを検討し、ピョートル改革の土台ともなった、アレクセイ帝時代の西欧化について論じたものである。

本論文で、まず評価されるべきは、ロシアにおける外国人問題について幅広い観点から、検討が加えられているという点である。時間軸の点からすれば、アレクセイ帝時代に建設された外国人村を中心にすえながら、リューリク朝時代からのロシアにおける外国人居留者の歴史をふりかえりつつ、ロシア史上における外国人村の意義を明らかにしている。また、ともすれば、専門の職能を携えた外国人によるロシアへの文物、技芸の流入という観点から語られがちな外国人問題に対し、ロシアに来て外国人村に住みついた住民たちが、自分たちの間で、さらには周辺のロシア人との間に関係を取り結ぶなかで独自の文化をはぐくみ、人生の軌跡を歩んだという側面にも目配りがなされている。例えば、論文の中で何度か登場するヨハン・グレゴリーは、ドイツで医師の息子として生まれ騎兵として軍務についたのちロシアに入国し、その後、外国人村の知人に請われてルター派教会の牧師をつとめつつ、アレクセイ帝の西洋演劇観賞の要求に応え演劇上演に尽力している。騎兵という職能をもってロシアに入国しながら、外国人村の住民やロシア人との関係の中で、軍務以外のさまざまな方面で活動しながら、キャリアを形成した様が活写されており、技能者の雇い入れにとどまらない外国人問題のありようが浮き彫りにされている。

また、本論文の柱の一つであるアレクセイ帝の治世の再評価もロシア近世史の見直しの試みとして興味深い。千葉氏は、ロシア在住の外国人との関係を軸としてアレクセイ帝の治世の特徴について論じ、「彼の西欧化・専制権力への意識はピョートル帝に匹敵するもの」と評している。西欧化の代名詞とされるピョートル 1 世の改革が前例のない規模とテンポで進められ、同時代のロシア社会から少なからざる反発を呼び起こしたのに対し、ピョートルの父であったアレクセイ帝は「もっとも温和なツアーリ」と称されたように伝統社会の側にも配慮しながら改革を進めた。この新旧のバランスを巧みにとりながら君臨したアレクセイ帝の統治の特質を明らかにした点は、近世ロシアを理解するうえでの貴重な貢献として評価できる。

千葉美保子氏は本論文において同時代人の手になる旅行記や日記などの各種史料や研

究文献を丹念に読み込みながら、近世ロシアに在住した外国人の活動の実態を明らかにしている。また、外国人の居住地として外国人村が設立されたのを、ロシアの西欧化における重要な一局面としてとらえ、同村の設立を命じたアレクセイ帝の改革への志向を説得的に描き出している。こうした特質をもつ千葉氏の本論文は、近世ロシア史研究における重要な課題である西欧化の解明に向けて重要な寄与をなすものと考えられる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。